

の實際を語り、平窯と登窯を論じ現今の瓦としての平瓦・巴瓦・唐草瓦・筒瓦、さては琉球の造瓦に及び、京都泉涌寺の瓦工を紹介し、造瓦上の文献又は一般資料として興味ある説明を付し、古瓦の文様と特質を明確に述べられておちゆる場合の圖版が揃へられてある。誠に古瓦蒐集の業ともなると同様には造瓦のテクニクを知らんとする人にこの上なき指針ともなるであらう。文章も圖版も共にあくぬけのした立派な趣味的の文獻と見て江湖に推薦したい。(藤田)

雜 報

○故小藤文次郎先生著述英文論文及單行本目錄

英文論文

1. Studies on some Japanese Rocks. *Quart. Journ. Geol. Soc. London*. XL, p. 431—437. 1884.
2. Studies on some Japanese Rocks. *Geol. Mag. Serd Dec. I*, p. 238—239. 1884.
3. A Note on Glaucophane. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. I (Pt. 1), p. 85—99. 1886.
4. Some Occurrences of Piedmontite in Japan. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. I (Pt. 3), p. 303—312. 1887.
5. On some Occurrences of Piedmontite-Schist in

- Japan. *Geol. Mag. Serd Dec. IV*, p. 330—331. 1887.
6. On some Occurrences of Piedmontite-Schist in Japan. *Quart. Journ. Geol. Soc. London*. XLIII, p. 474—480. 1887.
7. On the so-called Crystalline Schists of Chichibu. (The Sambagawan Series). *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. II (Pt. 2), p. 77—141. 1888.
8. The Archaean Formation of the Abukuma Plateau. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. V (Pt. 3), p. 197—293. 1893.
9. On the Cause of the Great Earthquake in Central Japan, 1891. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. V (Pt. 4), p. 295—353. 1893.
10. On the geologic Structure of the Malayan Archipelago. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. XI (Pt. 2), p. 83—120. 1899.
11. Notes on the Geology of the dependent Isles of Taiwan. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. XIII (Pt. 1), p. 1—57. 1899.
12. The Scope of the Volcanological Survey of Japan. *Publ. Earthq. Invest. Comm. in Foreign Languages*. No. 3, p. 89—103. 1900.
13. An orographic Sketch of Korea. *Journ. Coll.*

- Sc. Imp. Univ. Tokyo. XX(Art. 1), p. 1—61. 1903.*
14. Journeys through Korea. (First Contribution). *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo. XXVI(Art. 2), p. 1—207. 1909.*
 15. Journeys through Korea. (Contribution II). The Geology and Ore Deposits of the Holgol Gold Mine, Su-an District, Korea. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo. XXVII(Art. 12), p. 1—32. 1910.*
 16. On the Nepheline-Basalt from Yingé-m'an, Manchuria. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo. XXXII(Art. 6), p. 1—14. 1912.*
 17. Morphological Summary of Japan and Korea. 地質學雜誌. 22卷 歐文 115—126頁. 1915.
 18. The Great Eruption of Sakura-jima in 1914. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo. XXXVIII(Art. 3), p. 1—237. 1916.*
 19. On the Volcanoes of Japan. 地質學雜誌. 23卷 歐文 1—13, 17—28, 29—56, 77—94, 95—126頁. 1916.
 20. The Eruption of Sakura-jima prior to 1914. 地質學雜誌 23卷 歐文 165—180頁. 1916.
 21. The Characteristics of the Eruptions of Sakura-jima in 1914. 地質學雜誌. 23卷 歐文 181—204, 205—226頁. 1916. 24卷 歐文 1—17頁. 1917.
 22. The Tazima Earthquake of 1925. *Journ. Facul. Sc. Univ. Tokyo. Sect. II, II(Pt. 1), p. 1—75. 1926.*
 23. The Tazima Earthquake of 1925. *Proc. Imp. Acad. Tokyo. III(No. 4), p. 232—235. 1927.*
 24. The Tazima Earthquake of 1925. *Gerlands Beitr. z. Geophysik. XVII, p. 428—431. 1927.*
 25. The intersecting Twin Earthquake of Tango Hinterland in 1927. *Journ. Facul. Sc. Univ. Tokyo. Sect. II, II(Pt. 6), p. 265—329. 1928.*
 26. The Twin Earthquake of Tango in 1927. *Gerlands Beitr. z. Geophysik. XX, p. 308—311. 1928.*
 27. The Iwatsuki seismic Zone as a Factor of the Great Tokyo Earthquake of 1923. *Proc. Imp. Acad. Tokyo. V(No. 3), p. 130—132. 1929.*
 28. The Iwatsuki seismic Zone. *Gerlands Beitr. z. Geophysik. XXII, p. 315—317. 1929.*
 29. The Iwatsuki seismic Zone as a Factor of the habitual Tokyo Earthquake. *Journ. Facul. Sc. Univ. Tokyo. Sect. II, III(Pt. 1), p. 1—21. 1929.*
 30. The physiographic Division of Pacific North America. *do. p. 22—28. 1929.*
 31. The physiographic Relief of Circum-North Pacific *Gerlands Beitr. z. Geophysik. XXIV, p. 368—370.*

1929.

32. The Rocky Mountain in Eastern Asia. *Geolands Beitr. z. Geophysik*. XXVII, p. 241—243. 1930.

33. The Rocky Mountain Arcs in Eastern Asia. *Journ. Facul. Sc. Univ. Tokyo. Sect. II, III (Pt. 3), p. 131—183. 1931.*

34. The Seven Islands of Izu Province: A volcanic Chain. *Journ. Facul. Sc. Univ. Tokyo. Sect. II, III (Pt. 5), p. 205—219. 1931.*

單行本

一、石川縣加賀國手取川近傍地質概測 勸農局地質課 明治十三年

十三年

二、金石學 一名鑛物學 一六三頁 明治十七年

三、鑛物學初步 二冊 一八二頁+四六九頁 明治十八年、十九年

十九年

四、地文學講義 明治十九年

五、地理學教科書 一四二頁 明治二十三年

六、鑛物學字彙(神保松島兩氏共編) 一〇四頁 明治二十三年

年

七、地球發育史(今泉祐善訂) 四六頁 明治二十四年

八、增訂鑛物學字彙(神保松島兩氏共編) 第二版 一二七頁

明治三十六年

九、羅馬字索引朝鮮地名字彙(金澤庄三郎氏共編) 一七八頁

明治三十六年

十、朝鮮全圖(Dr. Koto's General Map of Korea) 明治三十六年

三十六年

十一、鑛産工業材料 一九六頁 明治三十八年

○圍爐裏の四邊の呼稱

地球三月號に於ける小牧實繁

氏の記事にあると同様な圍爐裏の四邊の呼稱が私の故郷(兵庫縣美方郡)にも行はれてゐることを既に周知かも知れませんが報告致します。圍爐裏は普通大黒柱から半間、小黒柱から一間の距離に相對する邊を有する一邊半間の正方形、小黒柱の側の邊に沿ふ座席をヨコザ(横座)といひ、大黒柱の側の座席をキノシリ(木の尻)と呼びます。他の二邊の中臺所に近い方に沿ふ座席をナベザ(鍋座)といひ、其對邊に沿ふ座席をタテザ(縦座)と名づけます。ヨコザは主人の席、タテザは客人の席です。主人より格が上の客でもヨコザには坐りません。ナベザは主婦又は同等以下の女客が坐るところです。名の如く爐に鍋を掛けたり下したりする側です。キノシリは下男下女及び主人より大分格の低い客の坐る席です。土間からの上り口も横縦兩座に對するものと他の二つに對するものと區別されてゐます。

(松村勇夫 三月十七日)

○イラク石油のバイブライン

イラク油田よりパレンスタインのハイファ港までの石油輸送管は工事既に完了、其間十二の沿道バンピング・ステーションも出来、一九三四年十月十四日午前二時半キルクの石油がはじめてハイファに

達した。

右パイプラインは一本約四十呎の長さのパイプを接合させ全長千二百哩の距離に達しキルクークからフアタ(Fehta)にてチゲリス河を越へニューラチス河の左岸フアヂタ(Hadhita)に達しそこでトリポリ線とハイフア線との二派に分れ、前者はフアタからシリア國境まで約八十哩を除きては佛國の治下たるシリアを通過しトリポリ港に達するもので後者よりも距離が短い、これは七月に送油されたが後者はトランスジョルダニアを横切つてハイフアに達するもので、一九三五年迄に完成の豫定であつたが案外に早く出来た、鐵管はすべて地中に埋没されてゐてこの線に沿ひ建設された電話線が唯一の外観上の目標となるに過ぎない。

○比律賓ダヴァオの農業

ダヴァオは颱風圏外にあつて地質豊饒な沖積土であり、降雨量も一年を通じて順調だから農業に適する、一九三二年度この州の農産は左の如くである。

マニラ麻	七一、〇一〇、〇〇〇株	椰子	一、七〇九、七四〇本
實椰子	八五六、五六〇本	珈琲	三七八、三〇〇本
米	一二、〇九〇ヘクター	玉蜀黍	四、六四〇ヘクター
甘蔗	一、九三七ヘクター	バナ	四〇〇、一五〇本

等熱帯農作物の外にコ、ア、ペルムダ、玉葱、アイリッシュユ、蕉、豆及柑橘等もつくられ商業的規模の下に栽培されてゐる即ちココアの如き一年一本三十五莖をとりうれば一ヘクター三百九十ペソの純利がある、もし手入をしたらば一本五十莖

は優に出来ると思はれる程の農地である、一九二九年の麻の不景氣以來、麻では生産費が償へないので背至るところに廣漠な麻畑をみた原野が今は米田ともなり甘蔗畑とかにかはつた、この州の農地は一、九二九、七二四ヘクターであるが開耕地僅に一〇六、〇〇〇ヘクターにすぎず、残りの百八十萬ヘクターは可惜未耕のまま放棄されてゐる、こゝにダウオの將來がある。

しかし何といつてもこゝはマニラ麻の本場だけで一九三四年中ダヴァオの麻の出廻高は六四〇、四〇五俵に上り、前年に比し三割増加、これを米國海岸向及奧地仕向と日本・英國及歐洲の四方面に仕向けるので、第一位は米國二十七萬俵であり、日本向は十八萬三千俵に上り全輸出の三割に當つてゐる、英國之に就いて八萬俵、歐洲大陸五萬俵といふ順で日本人商社の輸出に當るもの最も有力である。即ち輸出商館十社のうち邦人商社四社の取扱高は四十五萬俵に達し總輸出高の七割三分をしめてゐるのは心強いといはねばならない。

○最近五ケ年間に英兩國製綿布月當平均輸出數量

一九三三年來英國の占めたる從來の優越的地位は日本の輸出増加に奪はれ、一九三四年には一九三〇年に比して英國は五分一以上を減じ、日本は約五分三を増加し一ヶ月平均二億平方ヤード、一年二十四億平方ヤードに達し世界第一の綿布輸出國となつた。

英國綿布の月當平均(單位百萬平方碼)

仕向地	一九〇〇年	一九〇三年	一九〇五年	一九〇八年	一九一〇年
英領土	三〇、七	一六、四	三三、九	三九、二	三〇、八
歐洲	三六、〇	二四、四	三三、九	三六、〇	二五、七
印度セイロン	六、五	三三、〇	五、二	四、三	四、三
アジヤ	三六、六	三三、九	六、八	六、九	一〇、五
米大陸	二四、四	六、九	一九、四	二五、六	三六、二
アフリカ	二六、七	一〇、四	三〇、四	三三、三	二五、二
其他	七、七	六、〇	六、八	〇、七	八、三
合計	一〇〇、六	一四、〇	一八、二	二六、三	一六、〇

日本綿布の月當平均

仕向地	一九〇〇年	一九〇三年	一九〇五年	一九〇八年	一九一〇年
支那	四〇、二	三三、一	二四、三	二六、七	二四、四
蘭領印度	五、二	一七、七	二九、四	二五、二	一六、一
印度セイロン	三、七	三、七	五、七	三、六	六、五
アジヤ	三三、六	二〇、四	二五、二	二四、一	三〇、三
埃及	九、一	八、七	一六、三	一七、五	二〇、九
東アフリカ	三、一	四、四	六、四	五、六	三、〇
其他	七、一	九、八	一四、〇	一七、九	一六、五
合計	一三三、〇	二七、八	二六、三	二四、二	三九、五

但しこの表に見るが如く英帝國諸市場の大部分に於て日本品の進出は、或程度に阻止せられ、印度に於ても幾分其發展は抑制をうけてゐるが、かやうに英領で日本品を阻止した結果、日本はアジヤに於ける英領以外の諸國、即ち蘭領東印度・

比律賓・暹羅及波斯・アラビヤ等に綿製品の新市場を開拓した、又日本品の對アフリカ輸出も茲數年間に二倍し、東阿及埃及に於て優勢となつた。

○南棉北羊

朝鮮に於ける宇垣總督の政策たる南棉北羊の獎勵は追々と進んできた、即ち棉花は年々十二億四千萬斤からの繰綿を北米・印度・支那・埃及・蘭領印度等から輸入し四億五千萬圓内外の巨額を支拂つてゐるのであるから幾分でも之を自給するの急を認め、朝鮮南部に之を獎勵したのは古く明治四十年頃には咸鏡北道以外の全鮮に擴がり約四十萬町歩の在來棉があつたのに着眼した木浦領事若松三郎氏が明治三十七年始めて米國の陸地棉を高下島に試作し之に成功して翌年棉花栽培協會が出來この陸地棉キングス・インブルーヴド種を四方に配分し始め明治四十四年には三千四十二町の作反別に上り、實棉二十七萬斤繰綿百十二萬斤を得價格二十五萬圓に達した、ついで大正には十萬町歩に擴張する獎勵策をたて大正八年には二十五萬町歩に擴げる方策をとり二億五千萬斤の實棉生産を企てるまでに進んだ、その結果大正十五年には二十一萬六千町歩の作付となり最高潮に達したけれども棉價暴落のために擴張が出來ずついで昭和五年米棉増收のため米棉暴落の悲境に陥り、昭和六年十九萬町歩に激減するに至つた、しかし棉花の需要に多いのであるから今日に至つてこれを放棄することが出來ぬのみでなく既に農家百萬戸の重要農業となつてゐるのだから昭和八年度から再び増産をはか

り、南鮮六道には主として陸地棉をつくらすことにしてゐる、内地では氣候多濕のためにどうしてもつくれないが、南鮮は四月以降高温で且日照が多い、すこしく秋冷が早いので米國等の晩生種は出来ないが、早生種は立派な成績であるから、その種を選んで奨励し今や二十年を期して作付面積五十萬町歩實棉生産八億斤に達せしめんと努力するやうになつてゐる、勿論これは南鮮六道の外に京畿・黄海・平南の三道に及ぶ筈である。

つぎに羊毛も亦人生に必要であるので今日我國では軍衣並に一級國民被服として一ヶ年二億四千ポンドを消費してゐる、然るに國內では十六萬ポンドにすぎない、全部を濠洲羊毛に仰ぐのである、そこで内地でも大正七年以後奨励して一十萬圓の保護奨励を加へたのに、其結果は二萬七千頭内外の飼育數に止まる際朝鮮では大正七年北朝鮮に三十萬頭は飼育しうる見込をたて試験的に試みたところ頗る良好の成績を得た、不幸にして大正十三年行政整理で頓挫したけれども、既に三十萬圓の奨励金交付の卵は結んで昭和八年には二千六百七十五頭の綿羊數に達した、咸鏡北道では松田牧場・吉田牧場・東洋殖産會社の牧場等の成功者も出来、北鮮高地帯に於ける降雨量の少いことは特にこの業に好適で、八十萬頭以上の收容力があることが確められるに至つた、品種はコリデー種といふ新西蘭の原産で氣候の順應性に強いもの、體質は強健で、毛の多いものであるが北鮮六道、一家平均五頭當り

をかはずやうに余てゐるのである、同時に咸鏡北道會學及び咸州では郡農會のホームスパン加工場があつて、昭和十年一月には其第一回製品展覽會を京城三越でひらき即賣したところ非常によくうれた、背廣地三八點、オーバー二點、小供服地一、計四十一點、其他ネクタイ類二〇〇點等を出品して賣切れとなつた、筆者の天津の友人もこの出品を買つてきてゐる程になつた、總督府はこの奨励で結局は羊毛の自給自足を計畫してゐるのである。

○支那の水力發電

支那で電氣が始まつたのは明治十七年上海の獨逸人が共同租界内に電燈公司を創立したのに始まり其後北平や漢口にも電燈の會社が出来た、現在では支那の各都會に出来て民營のもの四百七十、官公營のもの二十七、其他外國資本のもの二十一、合計五百十八に上り、資本總額三億萬元に達し、發電力五十五萬八千ワットで、流石江蘇省は全國第一位になつた、すべて火力發電であるといつてよい。就中上海では人口三百五十萬の大都市であるから、其使用量は英國マンチエスター並にバーミンガム兩市を併せたものよりも多く、上海電力會社は其規模に於て東洋屈指の發電所となつてゐる、所が水力の方は一向に振はない、支那の水力は二千萬馬力と稱され、北部では黄河、中部の揚子江、南部の珠江等いづれも水勢も強く水量も大きいので、黄河の龍門、揚子江の三峽、珠江の蒼梧及撫河等は發電地點として常に支那人に誇稱され、黄河で一千萬馬力、長江で三千万馬力、珠江

で二百萬馬力が得られるとのべられてゐるけれども果してどうかは疑はしい、さうして今日實際に發電してゐる水力は僅に左の七個所で其發電量は二千二百八十四キロワットにしかなしてゐない。

一、雲南省昆明龍電燈公司、昆明城外十八マイルの石龍壩で千七百五十キロ、現在水量僅に三立方メートルで發電の用をなさない(水力タービン三臺)(大正二年創立)

二、四川省瀘縣濟和水電公司、水源は龍窩で落差三十米、水量一立方メートル、發電量百四〇キロ、(大正十二年創立)

三、福建省南平電氣公司、昭和七年創立閩江の上流落差約一五、二米水量二、三立方メートル八十キロ發電。

四、山東省濟南第一水電廠、昭和四年建設、落差五、七米水量五十立方メートル、發電十五キロ、實際は落差四、七呎で五キロ位しか出ない、水源は泉水である。

五、山西省太原蘭村水力發電廠、汾河の水をとつて落差一、五米水量一、四立方メートル發電十二キロ。

六、福建省永安昭明水電公司、大正十四年創立爬溪の水をとる落差三米發電二五キロワット、永安城に近い。

七、四川成都水力發電廠、成都東門外にあつて水源は郫江である、タービン十臺、二〇〇キロ。

いづれにしても小さいものばかりで御話にならないが、今

度國民政府の計畫せる新聞紙製造工場に附屬の水力發電の設計だけは出来た、浙江の温州及處州で地方一帯の山林から流れる水が枯涸しないといふので、水力をひいて、この地方で新聞紙の原料をつくとはいふ、シーメンス會社がこれにかゝつて工場及發電に四百八十萬弗の財を抛つことになつた、この温州の川の發電所は川幅一八一米の所でダムをつくり、二箇のタービンで増水期に五千四百馬力、減水期千馬力を得、有效馬力三千六百で製紙をやるといふことである、できれば貧弱な支那の水力發電史上「エポック」となるわけであらう。

○雄羅トンネル全通

日滿交通史上に新紀元を劃する雄羅トンネルは、一月十四日全通した。同トンネルは、昭和八年二月實測を完了し、北口(雄基側)は同年四月十二日、南口は同年四月十三日に鉄人を爲し、約一箇年半の日子を費し、今回の全通を見たのであるが隧道延長三軒八五で、館洞嶺西方の最高峰嶺香岩と稱する巨岩重疊せる峻嶺の直下四七〇米の山腹を西南に貫き、北口より一軒六六米を五百分の一勾配で上り、それより百分の一勾配で羅津に向つて下るものであつて、隧道断面は日鮮滿を通じて最大なものとなつてゐる、而して北口には林滿鐵總裁の揮毫せる「長樂萬年」、南口には宇垣朝鮮總督の揮毫せる「世泰時豐」の額を掲げることになつてゐる。(朝鮮)